

小さな火花のピエロ

——「線香花火」に寄せて——

「線香花火」ということばを聞いたとき、幼い頃のいろいろのイメージが甦って来た。

そこには夏の夜の風の匂いがあり、そこに住んでいた人たちのさんざめきがきこえて来たり、またそこには過ぎ去ったま昼の暑さやざわめきから解放されたやすらぎの雰囲気までが甦って来た。

私にとって「線香花火」は私の幼い頃を象徴する単なる玩具でもなく、郷愁という題名をもった風物詩のひとつの素材でもなく、私自身のからだの中に沈潜してしまっていて神秘的なひびきすらもつ美しい物語そのもののように思われる。

不思議に「線香花火」そのものだけが浮き彫りにならなくて、その周囲のひとつやものの中にとけこんで光と影のようにひとつの情景となっている。それはあたかもレンブラントやラ・トゥールの作品に見るような暗闇の中に生命を宿した小さな光が削り出す映像さながらのようでもある。それはまさ

に不可思議とも思える「生きた小さな火の饗宴の図」とでも言えよう。

十五センチばかりのか細いいんぎ闇のような乾いた草の茎のような感触が大へん印象的で、その先端に小さな黒い泥塊のようなものがついていて小人がもつ槍のようにも見えた。それが十本ほどたばねられていて細い紅色の紙で帯状にしばられていた。それは夜店や駄菓子屋から買って来た宝物でもあった。

その束から折れないようにそっと一本を抜きとるとたいていは父親の煙草盆の炭火にあてがって火をつけた。蚊やり線香の火を使ったこともある。

その一瞬、閃光と白煙が広がる。それは魔法そのものようであった。ただ息をひそめる沈黙の世界でもあった。

その中から小さいけれどもすべてのものを溶解してしまうかのような灼熱の火の塊が生成される。それはきつとマグマのようにあつたろう。

河 辺

杲あきら

そしてそれは生命をもった生きもののようにとろとろとろごめく。宇宙の中で地球などが生成された前夜を偲はせる。その一点をみつめていたのが今もはつきりと想い出される。

余りの緊張に指先がふるえた瞬間、小さな火塊は地上に落ちて終った。「馬鹿ね、そっとしないと」と友だちに叱られる。手の持ち方だろうかといぶかったりもした。火の塊が重すぎるのではとも考えた。何度も何度も心を配ったが落ちる時には落ちた。そこにはロジックや予断すら許さない大自然があった。こんどこそとだんだん祈るような気持ちになつて小さな震動の静まるのを待った。——新しい生命の誕生を待つときの祈りにも似た気持ちだつたらうかとも思う。——激しい震動と祈りが終る頃、その火の塊は美しい「火の滴」のようにかわつた。

パッパッパッと小さな「火の華」がとびかう。実にこころよい光と音の時空の間がそこにある。リズムがある。「火の散華」である。

そしてその一つ一つの「火の華」の形はマンダラのようにでもあり、大聖堂のステンドグラスのばら窓のような輝きと形体とが感じられた。それは、幼い子どもたちの心のショックに対しての守りの球や円の形であり光であつたのかも知れない。(子どもたちは生活の中で様々な不安やショックを経験する時、円や四角形の核のモチーフを夢みたり、絵に描いた

りする。「これは心の真に大切な中心を象徴しているのだ」とユングは考えた)

そして飛散するその様は広大な宇宙に飛んでいく翼のある天馬にも見えよう。そこには精神の超越性とも呼ばれる自由や解放への欲求の象徴があるとも考えられよう。華麗ともいえるこの火の散華に心を奪われながら精神の全体性や超越性を獲得していったのかも知れない。

つかの間の安定した興奮に満足した頃、「火の散華」は「細火」とも名づけたいような小さな小さな線状の火となつて次第に小さく地上に落ちて消えていった。赤い一点が残つた時にはもとの大きな闇が広がり、幼い心の中に光と暗さの対比の美しさと不可思議なところよいやすらぎと「あしたまたね」といういきいきしさが残つたように思う。

小さな「線香花火」との出会いの中で大きな宇宙を観ることができた満足と喜びがからだの中に沈潜していまもいきつづけているのだと思う。

生れてはじめて「火」というものを自己の手中にしたその恐ろしさと驚きと神秘さに目を輝かせた幼い子どもたちは森や洞窟や暗夜の中で火を発見した人間にも通じる根源的なものに出会うことができるのだと思うと、「線香花火」は子どもにとつて人間の根源的な世界に遊ばしてくれる「小さな火のピエロ」のように思われて来た。(洗足学園短期大学)